

## デジタル地図帳を活用した地図帳指導

埼玉県 さいたま市立高砂小学校 千明 勉

## 1 はじめに

小学校学習指導要領 社会で示されているように、第4学年以降においては地図を効果的に活用し、地図帳に親しみをもたせ、問題解決のための教材として活用する知識や能力を育てることが必要である。とりわけ、使いはじめの第4学年では、地図を読み取る際に必要な約束事、索引の使い方をしっかりと理解させることが大切である。

本稿では、『デジタル教科書 楽しく学ぶ小学生の地図帳』（以下、『デジタル地図帳』）を活用した地図帳指導の実践について報告する。

単元名は「地図帳に親しもう」として2時間で構成し、1時間目は地図の約束事や索引の使い方の理解をはかり、2時間目はフラッシュカードを活用し、都道府県に対する関心を高める内容とした。

## 2 地図の約束事や索引の使い方を確かめる

『デジタル地図帳』は、紙の地図帳の構成を正確に再現している。方位記号の解説部分では、画面上で八方位の記号をドラッグして移動できる。「かしわら駅から見て、たかいだ駅はどちらの方位にあるか」と発問し、方位の言い表し方を確かめたあとに、「では、たかいだ駅から見て、かしわら駅はどちらの方位にあるか」と発問し、子どもたちの反応をもとにして方位記号を移動し、言い表し方が変わることに気づかせた。

縮尺は地図によって異なり、子どもたちに理解させるのが難しい。そこで縮尺の記号も画面上でドラッグして移動できる、縮尺の解説部分の機能

を利用する。2万5000分の1の地図では2cmは500mであることについて、記号を移動しながら繰り返して確かめ、距離を実感的にとらえさせるようにした。

索引の使い方は、『デジタル地図帳』の動画で、どのような手順で目的の場所を探すのかをていねいに確かめた。動画は3回繰り返し、1回目は説明しながら、2回目は言葉を出さずに動画だけで手順を確認させ、3回目は実際に地図帳を使いながら目的の地名である「柏原」を見つけた。



動画「さくいんをつかおう!」の画面

子どもたちが、「わかった」「なるほど」とつぶやいていたので、教師から新たな地名を提示し、索引を使って調べさせると「よぉ〜し」と意欲的に取り組んだ。全員が調べられたことを確認してから、「今度は地名探しゲームをしよう」となげかけた。「地名が見つかったら手をあげ、1番から20番まで数えます」と、「地名探しゲーム」の説明を行った。子どもたちはやりたくて、指先を索引のページにはさんで準備するほどだった。第1問を出したらいっせいに調べ始めた。「1番」「2番」と呼んであげると、歓声が生じた。調べられなかった子どもには、まわりの友達がていねいに教えてあげることにした。

ここで終わらせてはもったいない。まず1番の子どもには、地名は何ページのどこにあったか、2番の子どもには都道府県名は何か、3番以降の子どもにはその場所はどこなところかと発問していった。3番以降の子どもたちは、地名周辺の地

図記号を手がかりにして、土地利用のようす、交通のようす、特産物などを読み取っていった。

子どもたちの感想には、「地図帳の索引を使うと便利で、探したい場所がすばやく見つけられることがわかりました」、「地図帳がボロボロになるまで使っていきたいです」など、地図帳に対する関心の高まりがうかがえた。

### 3 フラッシュカードを使う

『デジタル地図帳』には、地図記号や都道府県のフラッシュカードクイズが収録されており、ワン・クリックで簡単に操作ができる。授業を始める前に3分間クイズを行うことによって、地図記号や都道府県名のよりいっそうの定着が期待できる。今回の実践では「都道府県フラッシュカードクイズ」を活用し、都道府県クイズづくりに取り組んだ。

「都道府県フラッシュカードクイズ」は、都道府県の形が示され、県名をあてるためのヒントが地理的特徴、歴史的事項、特産品など三つ準備されている。子どもたちは、形が示された瞬間に、思い思いに都道府県名を発言した。正解が出ないようなら、ヒントを一つずつ提示する。例えば、群馬県など埼玉県に隣接する都道府県名は、すべてのヒントを提示しなくとも正解にいたる傾向にあった。そういう場合は、残りのヒントには何が書かれているのかを予想してからヒントを見せた。また、ヒントで示された内容が本当なのかどうか

を実際に地図帳で確かめることにより、必然的に地図帳を活用させる場面を設定した。

「都道府県フラッシュカードクイズ」を繰り返して、都道府県に対する関心の高まりを見取り、自分たちの住んでいる埼玉県ならばどんなヒントが考えられるかと発問した。子どもたちは、県の形、特産品、隣接する県名、交通のようすなどに着目し、ヒントを考えた。

最後に「自分で問題をつくってみよう」となげかけ、ひとりひとりが都道府県を選択し、地図帳を調べながら、ヒントを考え、問題をつくった。授業時間は終わったが、給食準備中や休み時間などに問題を出し合って、正解を喜ぶ子どもの姿が見られた。

### 4 おわりに

『デジタル地図帳』を活用して授業展開をはかることで、次のような効果が実感できた。まずは、学級全体で地図帳を共有するツールとして有効であること。次に、何度も繰り返して活用できること。そして、地図帳に対する関心を高められること。

一方で、子どもたち自らが『デジタル教科書』を操作できる場面を設定し、より関心を高めるくふうが課題としてあげられる。

『デジタル地図帳』には、子どもが主体的に地図帳を活用し、必要な技能を無理なく身につけさせるための指導や支援のヒントがたくさんある。



「都道府県フラッシュカードクイズ」の画面



フラッシュカードクイズづくりをする児童